



# 山月記

*Sangetsu ki*

中島 敦

*Atsushi Nakajima*

**Raptor**

山月記

中山月記  
中島敦

山月記

隴西の李徴は博学才穎、天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね、ついで

江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃むところ頗る厚く、賤吏に甘ん

ずるを潔しとしなかつた。いくばくもなく官を退いた後は、故山、に歸臥し、

人と交を絶つて、ひたすら詩作に耽つた。下吏となつて長く膝を俗悪な大官

の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのである。しか

し、文名は容易に揚らず、生活は日を逐うて苦しくなる。李徴は漸く焦躁に

驅られて来た。この頃ころからその容貌ようぼうも峭刻しょうこくとなり、肉落ち骨秀ひいで、眼光のみ

徒らいたずに炯々けいけいとして、曾かつて進士とうだいに登第とうだいした頃の豊頬ほうきょうの美少年おもかげの倂はは、

何処どこに求めようもない。数年の後、貧窮たに堪えず、妻子の衣食のために遂ついに節を

屈して、再び東へ赴き、一地方官吏の職を奉ずることになった。一方、これは、己おのれ

の詩業に半ば絶望したためでもある。曾ての同輩はるは既に遥か高位に進み、彼が昔、

鈍物として齒牙しがにもかけなかったその連中の下命を拝さねばならぬことが、往年の

儁才しゅんさい李徴いの自尊心きざつを如何かたに傷けたかは、想像かたに難くない。彼は快々おうおうとして

楽しまず、狂悖きょうはいの性は愈々抑え難がたくなった。一年の後、公用で旅に出、汝水じよすい

のほとりに宿った時、遂に発狂した。或夜半ある、急に顔色を変えて寢床から起上る

と、何か訳の分らぬことを叫びつつそのまま下にとび下りて、闇やみの中へ駈出した。

彼は二度と戻もどって来なかった。附近の山野を搜索しても、何の手掛りもない。そ

の後李徴がどうなったかを知る者は、誰だれもなかった。

翌年、監察御史、陳郡の袁えんさん 儻たうという者、勅命を奉じて嶺南れいなんに使し、途みち

に商於しょうおの地に宿った。次の朝未まだ暗い中に出発しようとしたところ、馭吏うちが言う

ことに、これから先の道に人喰虎ひとくいじゅうが出る故、旅人は白昼でなければ、通れない。

今はまだ朝が早いから、今少し待たれたが宜よろしいでしょうと。袁えんは、しかし、

供廻ともまわりの多勢ともせなのを待み、馱吏しりぞの言葉を斥しりぞけて、出発した。残月の光をたより

に林中の草地を通って行った時、果して一匹もうこの猛虎くさむらが叢むらの中から躍り出た。虎

は、あわや袁えんに躍りかかるかと思えたが、忽たちまち身をひるがえ翻ひるがえして、元の叢に隠れ

た。叢の中から人間の声で「あぶないところだった」と繰返しつぶや呟つぶやくのが聞えた。

その声に袁えんは聞き憶おぼえがあった。驚懼きょうくの中にも、彼は咄嗟とつさに思いあたって、叫

んだ。「その声は、我が友、李徴子ではないか？」袁<sup>ゑん</sup>修<sup>しゆ</sup>は李徴と同年に進士の第に登り、友人の少かつた李徴にとっては、最も親しい友であつた。温和な袁<sup>ゑん</sup>修<sup>しゆ</sup>の性格が、峻<sup>しゆん</sup>峭<sup>しやう</sup>な李徴の性情と衝突しなかつたためであらう。

叢の中からは、暫<sup>しほ</sup>く返辞が無かつた。しのび泣きかと思われる微<sup>かす</sup>かな声が時々洩<sup>も</sup>れるばかりである。ややあつて、低い声が答えた。「如何にも自分は隴西の李徴である」と。

袁<sup>ゑん</sup>修<sup>しゆ</sup>は恐怖を忘れ、馬から下りて叢に近づき、懐<sup>なつ</sup>かしげに久<sup>きゆう</sup>闊<sup>かつ</sup>を叙した。そ

して、何故叢なぜから出て来ないのかと問うた。李徴の聲が答えて言う。自分は今や異類の身となっている。どうして、おめおめともと故人の前にあさましい姿をさらせようか。かつ又、自分が姿を現せば、必ず君に畏怖嫌厭いふけんえんの情を起させるに決っているからだ。しかし、今、図らずも故人に遇あうことを得て、愧赧きたんの念をも忘れる程に懐かしい。どうか、ほんの暫くでいいから、我が醜悪な今の外形を厭いとわず、曾て君の友李徴であったこの自分と話を交してくれないだろうか。

後で考えれば不思議だったが、その時、袁ゆゑん修は、この超自然の怪異を、実に素直



に受容うけいれて、少しも怪もうとしなかった。彼は部下に命じて行列の進行を停とめ、自分かたわらは叢の傍かたわらに立って、見えざる声と対談した。都うわさの噂、旧友の消息、袁ゆゑん修が

現在の地位、それに対する李徴の祝辞。青年時代に親しかった者同志の、あの隔てのない語調で、それ等らが語られた後、袁ゆゑん修は、李徴がどうして今の身となるに至いたつたかを訊たずねた。草中の声は次のように語った。

今から一年程前、自分が旅に出て汝水のほとりに泊った夜のこと、一睡してから、ふと眼めを覚ますと、戸外で誰かが我が名を呼んでいる。声に応じて外へ出て見ると、

声は闇の中から頻りに自分を招く。覚えず、自分は声を追うて走り出した。無我しき夢中で駆けて行く中に、何時いつしか途は山林に入り、しかも、知らぬ間に自分は左右の手で地を攫つかんで走っていた。何か身体中からだに力が充ち満ちたような感じで、軽々と岩石を跳び越えて行った。気が付くと、手先や肱ひじのあたりに毛を生じているらしい。少し明るくなってから、谷川に臨んで姿を映して見ると、既に虎となっていた。自分は初め眼を信じなかった。次に、これは夢に違いないと考えた。夢の中で、これは夢だぞと知っているような夢を、自分はそれまでに見たことがあったから。

どうしても夢でないと悟らねばならなかった時、自分は茫然ぼうぜんとした。そうして懼おそれた。全く、どんな事でも起り得るのだと思つて、深く懼れた。しかし、何故こんな事になつたのだろう。分らぬ。全く何事も我々には判らぬわか。理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取つて、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きものうさぎのさだめだ。自分は直ぐすに死を想おもうた。しかし、その時、眼の前を一匹の兎が駈け過ぎるのを見た途端に、自分の中の人間は忽ち姿を消した。再び自分の中の人間が目を覚ました時、自分の口は兎の血に塗まみれ、あたりには兎の毛が散らばつて

いた。これが虎としての最初の経験であった。それ以来今までにどんな所行をし続けて来たか、それは到底語るに忍びない。ただ、一日の中に必ず数時間は、人間の心が還かえって来る。そういう時には、曾ての日と同じく、人語も操あやつれば、複雑な思考にも堪え得るし、経書けいしょの章句を誦そらんずることも出来る。その人間の心で、虎としての己おのれの残酷ざんぎやくな行おこないのあとを見、己の運命をふりかえる時が、最も情なく、恐しく、憤いきどおろしい。しかし、その、人間にかえる数時間も、日を経るに従って次第に短くなって行く。今までは、どうして虎などになったかと怪しんでい

たのに、この間ひよいと気が付いて見たら、己おれはどうして以前、人間だったのかと考えていた。これは恐しいことだ。今少し経たてば、己おれの中の人間の心は、獣としての習慣の中にすっかり埋うもれて消しまえて了しまうだろう。ちょうど、古い宮殿の礎いしづえが次第に土砂に埋没するように。そうすれば、しまいに己は自分の過去を忘れ果て、一匹の虎として狂い廻り、今日のように途で君と出会ともっても故人と認めることなく、君を裂くろき喰くろうて何の悔も感じないだろう。一体、獣でも人間でも、もとは何か他ほかのものだったんだろう。初めはそれを憶えているが、次第に忘れて了しまい、初めから

今の形のものだったと思い込んでいるのではないか？ いや、そんな事はどうでも

いい。己の中の人間の心がすっかり消えて了えば、恐らく、その方が、己はしあわせになれるだろう。だのに、己の中の人間は、その事を、この上なく恐しく感じて

いるのだ。ああ、全く、どんなに、恐しく、哀しく、<sup>かな</sup>切なく思っているだろう！

己が人間だった記憶のなくなることを。この気持は誰にも分らない。誰にも分らない。己と同じ身の上に成った者でなければ。ところで、そうだ。己がすっかり人間でなくなつて了う前に、一つ頼んで置きたいことがある。

袁<sup>ゑん</sup>修<sup>しゆ</sup>はじめ一行は、息をのんで、叢<sup>そう</sup>中<sup>ちゆう</sup>の声の語る不思議に聞入っていた。声は続けて言う。

他でもない。自分は元来詩人として名を成す積りでした。しかも、業<sup>い</sup>未<sup>ま</sup>だ成ら

山月記  
ざるに、この運命に立至った。曾て作るところの詩数百<sup>ぺん</sup>篇<sup>もと</sup>、固より、まだ世に行

われておらぬ。遺稿の所在も最早<sup>もはや</sup>判らなくなっていよう。ところで、その中、今も

尚<sup>なお</sup>記<sup>き</sup>誦<sup>しよ</sup>せるものが数十ある。これを我が為<sup>ため</sup>に伝録して戴<sup>いた</sup>きたいのだ。何も、

これに仍<sup>よ</sup>つて一人前の詩人面<sup>しじ</sup>をしたいのではない。作の巧拙は知らず、とにかく、

産を破り心を狂わせてまで自分が生涯しょうがいそれに執着したところのものを、一部なりとも後代に伝えないでは、死んでも死に切れないのだ。

袁修ゆゑんしゆは部下に命じ、筆を執つて叢中の声に随したがつて書きとらせた。李徴の声は叢

山月記  
の中から朗々と響いた。長短凡およそ三十篇、格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の

才の非凡を思わせるものばかりである。しかし、袁修ゆゑんしゆは感嘆しながらも漠然ぼくぜんと次

のように感じていた。成程なるほど、作者の素質が第一流に属するものであることは疑い  
ない。しかし、このままでは、第一流の作品となるのには、何処どこか（非常に微妙な



点に於ておい 欠けるところがあるのではないかと。

旧詩を吐き終った李徴の声は、突然調子を変え、自らを嘲あざけるか如くに言った。

羞はずかしいことだが、今でも、こんなあさましい身と成り果てた今でも、己は、おれ

### 山月記

己の詩集が長 安風流人士の机の上に置かれている様を、夢に見ることがあるの

だ。岩窟がんくつの中に横たわって見る夢にだよ。嗤わらってくれ。詩人に成りそこなつて虎

になった哀れな男を。(袁ゆゑん修は昔の青年李徴の自嘲癖を思出しながら、哀しく聞

いていた。) そうだ。お笑い草ついでに、今の懐おもいを即席の詩に述べて見ようか。

この虎の中に、まだ、曾ての李徴が生きているしるしに。

袁<sup>ウヰ</sup>修<sup>シウ</sup>は又下吏に命じてこれを書きとらせた。その詩に言う。

偶因狂疾成殊類 災患相仍不可逃

今日爪牙誰敢敵 当時声跡共相高

我為異物蓬茅下 君已乘<sup>カ</sup>輶<sup>キョウ</sup>氣勢豪

此夕溪山对明月 不成長嘯但成<sup>ク</sup>嗥

時に、残月、光冷やかに、白露は地に滋く、樹間を渡る冷風は既に暁の近きを告げていた。人々は最早、事の奇異を忘れ、肅然として、この詩人の薄倖を嘆じた。李徴の声は再び続ける。

なぜ  
何故こんな運命になったか判らぬと、先刻は言ったが、しかし、考えように依れば、思い当ることが全然ないでもない。人間であった時、己は努めて人との交を避けた。人々は己を倨傲だ、尊大だといった。実は、それが殆ど羞恥心に

近いものであることを、人々は知らなかった。勿論、曾ての郷党きやうとうの鬼才といわれた自分に、自尊心が無かつたとは云いわれない。しかし、それは臆病おくびような自尊心とでもいふべきものであつた。己は詩によつて名を成そうと思ひながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交つて切磋琢磨せつさたくまに努めたりすることをしなかつた。かといつて、又、己は俗物の間に伍ごすることも潔いさぎよしとしなかつた。共に、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心との所為せいである。己の珠たまに非あらざることを惧おそれるが故ゆえに、敢あえて刻苦みして磨みがこつともせず、又、己の珠なるべきを半ば信まずるが故ゆゑに、碌ろくろく々と

して瓦かわらに伍することも出来なかった。己おれは次第に世と離れ、人と遠ざかり、憤悶ふんもんと慙ざんとによつて益々ますます己の内なる臆病な自尊心を飼いふとらせる結果になつ

た。人間は誰でも猛獸使であり、その猛獸に当るのが、各人の性情だという。己おれの

場合、この尊大な羞恥心が猛獸だった。虎だったのだ。これが己を損い、妻子を苦

しめ、友人を傷つけ、果ては、己の外形をかくの如く、内心にふさわしいものに変

えて了つたのだ。今思えば、全く、己は、己もの有わつていた僅わずかばかりの才能を空

費して了つた訳だ。人生は何事をも為なさぬには余りに長いが、何事かを為すには余

りに短いなどと口先ばかりの警句を弄もよほしながら、事實は、才能の不足を暴露ばくろする  
かも知れないとの卑怯ひきような危惧きぐと、刻苦いとを厭いとう怠惰すべとが己の凡すべてだったのだ。己  
よりも遥かに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩  
家となった者が幾らでもいるのだ。虎と成り果てた今、己は漸ようやくそれに気が付い  
た。それを思うと、己は今も胸を灼やかれるような悔を感じる。己には最早人間とし  
ての生活は出来ない。たとえば、今、己が頭の中で、どんな優れた詩を作ったにした  
ところまで、どういふ手段で発表できよう。まして、己の頭は日毎ひごとに虎に近づいて行

く。どうすればいいのだ。己の空費された過去は？ 己は堪らなくなる。そうい

う時、己は、向うの山の頂の巖いわに上り、空谷くうこくに向って吼ほえる。この胸を灼く悲し

みを誰かに訴えたいのだ。己は昨夕も、彼処あそこで月に向って咆ほえた。誰かにこの苦し

みが分わりつて貰もらえないかと。しかし、獣どもは己の声を聞いて、唯ただ、懼おそれ、ひれ伏

すばかり。山も樹きも月も露も、一匹の虎が怒り狂たけつて、哮たけつているとしか考えな

い。天に躍り地に伏して嘆なげいても、誰一人己の氣持を分わかつてくれる者はない。ちよ

うど、人間やだった頃、己の傷やつき易やすい内心を誰も理解してくれなかったように。

己の毛皮の濡れたのは、夜露のためばかりではない。

漸く四辺の暗さが薄らいで来た。木の間を伝って、何処からか、あたり 暁角が哀しどこ

げに響き始めた。

最早、別れを告げねばならぬ。酔わねばならぬ時が、(虎に還らねばならぬ時が) 近づいたから、と、李徴の声が言った。だが、お別れする前にもう一つ頼みがある。

それは我が妻子のことだ。かれら 彼等は未だま 統略とくにいる。固より、己の運命に就いては知る筈はずがない。君が南から帰ったら、己は既に死んだと彼等に告げて貰えないだろ



うか。決して今日のことだけは明かさないうで欲しい。厚かましいお願いだが、彼等の孤弱を憐れんで、今後とも道塗に飢凍することのないように計らって戴けるならば、自分にとって、恩倖、これに過ぎたるは莫い。

言終つて、叢中から慟哭の聲が聞えた。袁修もまた涙を泛べ、欣んで李徴の意に副いたい旨を答えた。李徴の聲はしかし忽ち又先刻の自嘲的な調子に戻つて、言った。

本当は、先ず、この事の方を先にお問い合わせすべきだったのだ、己が人間だったなら。

飢え凍えようとする妻子のことよりも、己おのれの乏しい詩業の方を気にかけているよ  
うな男だから、こんな獣に身を墮おとすのだ。

そうして、附加つけくわえて言うことに、袁ゆゑん愔いんが嶺南からの帰途には決してこの途みちを通

らないで欲しい、その時には自分が酔っていて故人ともを認めずに襲いかかるかも知れ

ないから。又、今別れてから、前方百歩の所にある、あの丘に上ったら、此方こちらを振

りかえって見て貰いたい。自分は今の姿をもう一度お目に掛けよう。勇に誇ろうと  
してではない。我が醜悪な姿を示して、以てもつ、再び此処こゝを過ぎて自分に会おうと

の気持を君に起させない為であると。

袁<sup>ゑん</sup>修<sup>しゆ</sup>は叢に向つて、懇<sup>ねん</sup>ろに別れの言葉を述べ、馬に上つた。叢の中からは、又、

堪<sup>た</sup>え得ざるが如き悲<sup>ひ</sup>泣<sup>き</sup>の聲<sup>こゑ</sup>が洩<sup>も</sup>れた。袁<sup>ゑん</sup>修<sup>しゆ</sup>も幾度か叢を振返りながら、涙の中に

出<sup>で</sup>発<sup>はつ</sup>した。

## 山月記

一行が丘の上についた時、彼等は、言われた通りに振返つて、先程の林間の草地を眺<sup>なが</sup>めた。忽ち、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出たのを彼等は見た。虎

は、既に白く光を失った月を仰いで、二声三声咆哮ほうこうしたかと思うと、又、元の叢  
に躍り入って、再びその姿を見なかった。

本作品のテキストは「青空文庫」を利用し、再編集を加えました。

## 山月記

<http://p.booklog.jp/book/34673>

著者 : RaptorBooks

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/raptorbooks/profile>

表紙画像 : ゆんフリー写真素材集

Photo by (c)Tomo.Yun

<http://www.yunphoto.net>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/34673>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/34673>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.